東日本大震災を乗り越える実践的研究 第Ⅰ報

―福島の子どもに関わる生活と保育の さらなる充実を目指した研究の経緯と成果の検討―

Practical Research of get over The Great East Japan earthquake (March 11.2011) ―Consideration about Further enhance of Life and Education for Childcare in Fukushima―

（大学間連携等による共同研究・学科教育強化費実施研究）

大澤 力*・増田 まゆみ**・岩田 力*・那須 信樹*
森田 浩章**・今留 忍***・安達 祐子***・内野 美恵****
森 美智子*****・天野 珠路******・市川陽子*******

（*東京家政大学子ども支援学科、**児童学科、***看護学科
****ヒューマンライフ支援センター、*****人間環境大学
******鶴見大学短期大学部、*******市川クリニック）

キーワード：東日本大震災・福島復興支援・保育実践・保育研修・研究成果

はじめに

平成23年３月11日東日本大震災は、未曾有の災害であった。特に、原発事故による福島県の被害は深刻である。この状況は、子どもたちの健やかな成長・発達に多大な影響を及ぼす。そこで、歴史と伝統ある本学児童学，保育学等の力を活かし、生活科学研究所・温故知新プロジェクト（平成24～26年度）を組織し取り組んだ。その成果は、保育の本質に迫るものであり、保育実践において、自然との関わり、身体を動かすこと、人との関係性の構築の重要性を追認できた。[1) 2) 3)] これらの成果を踏まえ、大学間連携等による共同研究（平成27～29年度）（以下：本共同研究）として、研究フィールドを福島県内保育園・幼稚園・幼保連携型認定こども園：計３園に絞り、連携大学に災害看護および福島保育支援の実績ある２大学を選定し、福島の子どもに関わる生活と保育の更なる充実を目的とし、保育現場での保育実践に取り組み、終年度に啓蒙活動としての総括シンポウム開催および報告書の作成・配布といった実践研究展開を継続的に試みている。その成果は、震災・原発事故復興に利すると共に我が国将来の健全な乳幼児育成に関する向上、ことに保育実践,食生活,健康増進への多大な貢献が期待される。

なお、教員養成教育推進室「年報」における研究論文の作成・掲載が平成29年度内ということで、本共同研究は３年間の最終まとめの途上にある。しかし、平成30年度４月からの新学習指導要領、幼稚園教育要領[4)]や保育所保育指針[5)]、幼保連携型認定こども園教育・保育要領[6)]における施行直前といった重要な時節でもある。さらに、平成29年度子ども支援学科の学科教育強化費事業は、本共同研究に呼応した内容であることに相まって、その実践教育効果が現われつつあることから、平成29年度教員養成教育推進室「年報」における研究論文の執筆を行うこととした。３年目の本共同研究にて実施した『福島県内モデル保育園・幼稚園・幼保連携型認定こども園での保育実践（園生活・家庭生活・地域社会）における応用研究の実施や子どもに関わる生活と保育のさらなる充実へ向けた、発展内容の検討から実践を通した成果の学会報告を行った。さらに、東京家政大学キャンパスにおけるまとめのシンポジウム開催および報

告書の作成・配布』は、研究計画通り実践を続け、総合的な最終研究成果は平成30年度に向け各関連学会における研究発表や研究論文誌への総合的まとめとしての論文執筆・投稿・掲載の実施を予定している。

１．研究の目的

福島の子どもに関わる生活と保育の更なる充実を目的とし、保育現場での保育実践に取り組み,終年度に啓蒙活動としての総括シンポウム開催および報告書の作成・配布といった実践研究展開を行う。このことは、震災・原発事故復興に利すると共に我が国将来の健全な乳幼児育成に関する向上、ことに保育実践,食生活,健康増進への多大な貢献が期待される。

２．研究対象および方法

１）研究対象

平成27・28年度に引き続き平成29年度も福島県内の放射能汚染が課題となっている福島市（Ａ保育園）・いわき市（Ｈ幼稚園）・二本松市（Ｍ幼保連携型認定こども園）をモデル園とした。更に、平成29年度子ども支援学科の学科教育強化費事業に関わった本共同研究参加学生の一部を研究対象とした。

２）研究方法

福島県内の３モデル園（Ａ保育園・Ｈ幼稚園・Ｍ幼保連携型認定こども園：各１園ずつ）の継続的な協力を得て平成27・28年度の保育実践をモデル園の園長・副園長・就任等管理職と保育者及びリーダー学生との打ち合わせにより、計画策定・準備から実施、振り返りを進める。その際、これまでの平成24年からの保育実践研究の成果を活かした保育への取り組みにし、平成29年度子ども支援学科の学科教育強化費事業の実施成果の一部も鑑みた研究方法とした。

【研究期間】平成27年４月～平成29年３月および平成29年８月

【倫理的配慮】本共同研究に際し、研究の目的・方法を確認し、保育実践のビデオ・写真撮影等の記録を取ることの了解を得、学会発表・報告書作成・論文執筆等研究以外には使用しないこと、個人が特定されるような表記はしない等、また、本共同研究参加学生に関しても個人情報の取り扱いに十分配慮した。

３．研究の背景

本共同研究の原点とも云うべき『東日本大震災』は、子どもたちの健やかな成長・発達に多大な影響を及ぼすことが予想されている。また、地球規模での温暖化とも関係する世界各地での悪天候に起因する水害・風害・落雷の被害が明らかになっている。日本各地においても自然災害が多発している。また、北朝鮮によるミサイル発射や頻発するテロ事件など、子どもを取り巻く身近な環境は、自然環境・社会環境ともにその健やかな育ちがにとって不都合な状況を呈していることは間違いない。

そこで、子どもの心身の成長・発達にとって重要な保育・教育における近年の世界的な教育改革の動向を鑑みるとき、断片的な知識や技能の習得が目的ではなく、人間の全体的な能力をコンピテンシー（competency）という言葉で捉える教育政策が潮流となっている。日本の教育改革でも、その傾向は着実に推し進められ平成30年度から始まる「新学習指導要領」の全体像（図.１）[7] でも、保育や幼児教育を基盤とした教育政策が組み立てられた。

未来を創る人を育むことの基盤は、子ども自身が環境との相互作用を積み重ねることで培われる。しかし、地球や人類の将来を的確に見据え、実践的に多様で困難な課題を乗り越え、次の時代を創り出していく為には、人間の全体的な能力を力強く育む必要がある。自然を積極的に取り入れた「持続可能な開発のための教育（ESD：Education for Sustainable Development）」。現在の日本にとって、こうした保育・教育こそが是非とも必要だと考える。

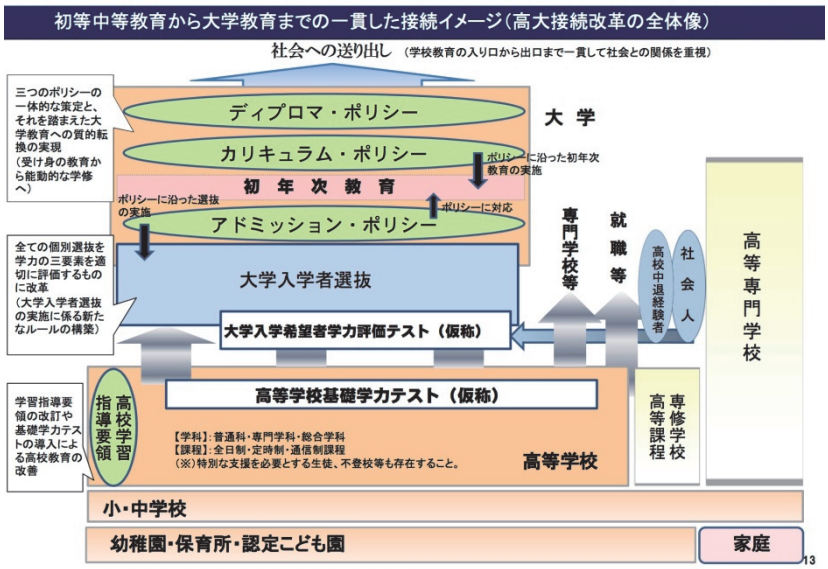


図１．保育・幼児教育から大学教育、そして社会活動までの構造図
文部科学省中央教育審議会（平成27年８月26日）
資料１－１「学習指導要領の改訂に向けた検討状況について」より

４．研究の結果と考察Ⅰ

（１）平成27年度実施内容：

１）食育保育実践～保育所・認定こども園

●平成27年11月29日（日）　福島市　Ａ保育園：

＜指導：高荒園長等・増田・那須・大澤・内野・学生（14名）＞

震災後、保護者の意向に添いつつ、保護者参加など積極的に食育に取り組んできた保育実践の積み重ねを生かし、学生が、異年齢の子どもとその保護者が「食」に関心をもち、多面的にクッキング体験を楽しむことを目的として計画した。園児・保護者・保育者・栄養士・学生が一体となり活動を展開した。特に創造力豊かで実践力のある栄養士２名は大きな力となった。

テーマ：めざせ！　コックさん！

ねらい：・食べ物に親しみ、関心を持つ。
・親子で一緒にホットケーキ作りを工夫して取り組むことを楽しむ。
・目標に向かってチームで協力し、達成感を味わう。

内　容：・食べ物を科学的にとらえることを育む経験として、野菜や果物の断面図を見て判断する。
・４つのコック修行を経験する。
①箱の中身当て修行～目に見えないものを触覚等により推察する②料理の音当て修行～聴覚刺激を行動と結びつける③たまご運び修行～卵の性状を理解し、協力する④材料当て修行⑤親子で一緒にホットケーキを作る～友だちや親と一緒に作る楽しさを味わう。

●平成27年12月４日（金）　二本松市M認定こども園（幼保連携型）

＜指導：古橋園長等・増田・那須・大澤・内野・学生（11名）＞

震災後、４年を経過し初めて給食に福島県産の米を使用するようになった。

幼保連携型認定こども園で、年長児（短時間児・長時間）を対象に取り組んだ。食に関心をもち、友だちと協力する楽しさ等を経験することを目的にして学生が計画し、園児・保護者・保育者・栄養士・学生とが一体となって活動を展開した。その後、学生は、年長児と食事（給食）を共にした。

テーマ：たべものはかせになろう！

ねらい：・五感を使って食べ物に親しみ、関心を持つ。

・目標に向かってチームで協力し、達成感を味わう。

・保護者、学生等さまざまな人とふれ合い、楽しみながら活動する。

内　容：・スクリーンに大きく映った野菜や果物の断面図を見たり，料理する際の音を聴く等して食品が何か当てる。

・食べ物に関する５つの修行をする。

①箱の中身当て修行　②料理の音当て修行　③加工品当て修行

④大豆運び修行　　⑤食育かるた修行

・たまご運びゲーム「とどけよう！たまごのはいたつやさん」をする。

２）　地域との連携～幼稚園

●平成27年11月７日（土）　いわき市　H幼稚園：

＜指導：生駒副園長等・増田・大澤・内野・学生（６名）＞

震災後より、保護者そして地域との連携の強化を図る幼稚園の取り組みの中から『ペコペコラリー』および『マルシェ（市場：バザー)』に参加した。「忘れかけている震災の記憶を紐解きながら今できることをしっかり子どもと実践しよう」という目的のもと、学生がひとつのコーナーを計画、準備した活動を園児・保護者・保育者・地域の方々等多様な人との出会いの中で展開した。

○テーマ：ペコペコラリー

ねらい：・いっぱい歩いて植田の町を知ろう。　（おなかペコペコ）

・町の人にあいさつしましょう。　　（頭ペコペコ）

ルール：グループに分かれて、さあ出発！←学生は各グループに分散して参加

・町中に散らばったメニューの文字を集めてメニューを完成させてください。正解するとポイント（500P）がもらえます。

・各チームには、秘密の到着時間が設定されています。時間に一番近いチームから順にポイントがもらえます。早くてもダメ、もちろん遅くてもダメです。１位：300P、２位：250P、３位：200P‥‥時速2.5Kmで歩いて、幼稚園内の探検や休憩などの時間を40分足すと秘密の時間になります。

・どこかにあいさつをすると“ほうとくコイン”を渡してくれる人がいます。

コインは１枚でメニューの１文字か、ポイント（100P）と交換できます。

・わんぱく山には、12：00までには到着しましょう。遅れると－300ポイントになります。間に合わなさそうなら、チェックポイントに向かう途中でも小山に戻ってOKです。

・集めたポイントの高い順から３チームに豪華？？景品があります。

○テーマ：マルシェ（市場：バザー）

ねらい：・地元のおいしいものをみんなで食べよう。

・みんなの手作り作品を手に入れよう。

・食育ゲームで食べ物に親しもう。←東京家政大学学生担当

まとめ：

福島県の保育所・幼保連携型認定こども園における保育実践（食育）を通して、子どもや保護者が関心をもち、主体的な取り組みを生み出す教材を開発・作成することができた。その際、「五感を駆使すること」が重要な視点となった。また、学生たちの創意工夫した教材や取り組みが園児・保護者の食への関心を高めた。その基盤となるのが、これまでの日常保育の中で、保育者・栄養士が一体感をもって食に関する工夫した取り組みの積み重ねである。

特に、県内産の食材の導入は、全保護者の了解を得ることを大切にしており、踏み切ることに困難性がある。検査基準が明確な米の導入を機に、子どもの日常生活の中での体験を付加することにより、主体的に生活する体験の積み重ねが可能になった。各保育室での米をとぎ、炊くという日常体験が、子どもの育ちにつながるという保育の基本を改めて認識できた。

さらに、福島の幼稚園における保育実践では、園、保護者、地域とを繋ぐことの重要性が明らかとなった。

（２）平成28年度実施内容：

１）　裏山散歩とたたきぞめ～認定こども園

●平成28年10月15日（土）　二本松市　M認定こども園：

＜指導：高橋副園長等・増田・那須・学生（12名）＞

震災前は園庭に隣接する裏山から近距離で行けた「智恵子の杜」が、震災後は迂回コースをとらざるを得ない状況となった。そこで、家族等様々な人と、長い距離を秋の木々の葉や草花、木の実等自然に関わりながらの散策、収集した葉・花等を使って叩き染めをし、創作の喜びを味わうこと等をねらいとした。途中の広場の芝生は震災後全て植え替えられ、また震災前の木製大型遊具は線量が高く取り壊し、市販の遊具に変わる等放射能汚染の影響により、子どもを取り巻く環境の変化を実感した。

学生作成の「あきのもり　はっけん！のーと」に、子どものつぶやきや見つけた自然の特徴を書き込んだり、写真を撮ることで、自然の不思議さ、美しさに気付き、自然に触れる喜びを家族で感じながら散策した。葉の色や形を注意深く観察する我が子の姿に、「日常は車での移動となり、こうした機会をもってこなかった」と語る保護者も多かった。

２）お祭り：街歩き , ピクニック , コーナー遊び～幼稚園

●平成28年11月５日（土）　いわき市　H幼稚園

＜指導：生駒副園長等・増田・大澤・谷岸・渡部・荒井・田所・学生16名＞

保護者会が主催する『わかば祭』のテーマは「こどもときょうの今を歩く　みる・しる・いかす」である。震災後、地域とのつながりを拡大・深化した活動を継続している。地域の自然・社会環境を通して育つという考えから、在園児、卒園児、そして、保護者等の参加であった。身近な自然との連携強化を図る＜植田の街を歩く、園のわんぱく山　森のワンスプーンピクニック＞で秋の味覚さんまを食し、学生達は自然の草花・葉・虫等を活かした４つのコーナーを企画・展開した。

３）　いっぱい歩いて、探して、みんなで作ろう！～保育園

●平成28年11月20日（日）　ふくしま市　Ａ保育園：

＜指導：高荒園長等・増田・那須・大澤・学生10名＞

現在も園内の「森の小径」は立ち入り禁止となるほど自然に恵まれた環境である。「冬になる前に‥いっぱい歩こう！いっぱい探そう！」をテーマに、「①園の周囲の秋から冬への自然の変化を、友だちや家族と共に発見しながらの散歩、②採集した葉、木の実・草等を長い布にみんなで工夫し、協力して叩き染めするおもしろさを味わう活動」に取り組んだ。

目的地まで行く途中、数個の黒いビニール袋に梱包された汚染物等が支柱のように立っている光景に、福島のまだまだ解決していない状況を実感した。戸外での活動を積極的に保育に取り入れられている。しかし、「親子なので平素の散歩とは違った楽しみ方をしていた。」「震災後、今回のようにゆっくり散歩する機会がなかった」等保育者から、日常保育とは異なる体験となっていることへの気付きや、今後の保育の在り方に活かそうとすることがアンケートに提示されていた。

まとめ：

福島の幼保連携型認定こども園・幼稚園・保育園における保育実践（みんなで自然と充分に関わることを楽しむ）を通して、子どもの育ちに自然とのかかわりがいかに重要であるかを示唆している。

震災１年後、保護者と保育者へのグループインタビューにより明らかになった３つの視点(①自然との関わりの機会をもつ②身体を思い切り動かす体験③人との関わりを広げ、深める体験)を尊重しての保育実践に取り組んできた。（本研究前の３年間の取り組み）

本研究２年目の取り組みにより子どもや保護者が身近な自然に改めて関心をもち、自然物を使っての親子の活動を通して、子どもの育ちに自然とのかかわりがいかに重要であるかが示唆された。また、園が核となり、園児、保護者、地域とを繋ぐことの重要性も明らかとなった。

活動後の保護者へのアンケート（４）の中から、３園共通の設問項目２つの自由記述についてキーワード分析法により分析したところ以下のことが明らかになった。

１「収集した葉・草花等を使った叩き染めをしている子ども様子と保護者自身の新たな発見等」について「積極的に探す」、「自分で選ぶ」、「真剣に行う」、「自分で探す」、「楽しそうに取り組む」等子どもの主体性、積極性、能動性等を示す姿から「このような遊びをすることに感心した」、「成長した」、「いろいろ考えてものづくりができるようになった、とってもたのしい～！と言いながのびのびと遊んでいる姿に喜びを感じた」、「自然の中での遊びや体験は親子が親子らしく子どもが子どもらしく活き活きと活動できる」等、保護者の子どもを見る目が「肯定的」になること、また子育てを楽しいものと受け止めている。このことは、子どもの育ちにとって重要な自己肯定感が育つことにつながると考えられる。

２「戸外遊びや植物、虫とのかかわりなど、子どもの遊びや生活の中で気を付けていること」について「天気が良い時はなるべく外で遊ぶ」、「基本的には自由にさせている」「除染が済んでいそうなところでは、外で思い切り草木、虫と触れ合ったり、芝に寝転んだり思う存分楽しませている」「休日やこういった活

動を利用して、外遊びを増やしていきたい」「洗濯などの手間を考えて制限してしまうことが多い」「野菜などはまだ県外や冷凍食品を使用している」等、震災から６年を経て、保護者の考えが２分し、揺れ動いていることが明らかになった。

なお、研究３年目の平成29年度の実施内容は、以下に示す通りである。詳細については、学会等、あらためて報告する予定である。

（３）平成29年度　実施内容

１）平成29年10月７日　福島市　A保育園

身近な温もりを親子で実感する保育実践（福島産木材を活用した親子で楽しむ音遊びと木工作）

２）平成29年10月14日　二本松市　M認定こども園(幼保連携型)

身近な温もりを親子で実感する保育実践（福島産木材を活用した親子で楽しむ音遊びと木工作）

３）平成29年11月４日　いわき市H幼稚園

園内の身近な自然環境と接しつつ、美味しく温もりある時間と場を共有する保育実践（身近な自然物を活用した表現活動や秋の味覚を親子で味わい楽しむ）

４）平成29年10月28日・東京家政大学板橋キャンパスにて実施 総合シンポジウム

新たな要領、指針から保育の真髄を読み解く～東日本大震災の継続的な保育実践を通して

緑苑祭　児童学科・保育科企画　学科シンポジウム

新たな指針、要領から保育の真髄を読み解く
－東日本大震災を乗り越えて保育を推進する中で－

日時：平成 29 年 10 月 28 日（土）14:00～17:00

場所：東京家政大学板橋校舎 120 周年記念館２F　120 - 2C講義室
（東京都板橋区加賀 1-18-1）

企画代表者：増田まゆみ（東京家政大学家政学部児童学科教授）

はじめに　企画主旨及び講師紹介　増田

話題提供

高荒正子氏（あすなろ保育園園長）

天野珠路氏（鶴見大学短期大学部）

大澤力，増田まゆみ　東京家政大学の取り組み

秋田喜代美氏（東京大学大学院）ビデオレター

ミニレクチャー

無藤隆氏（白梅学園大学大学院）

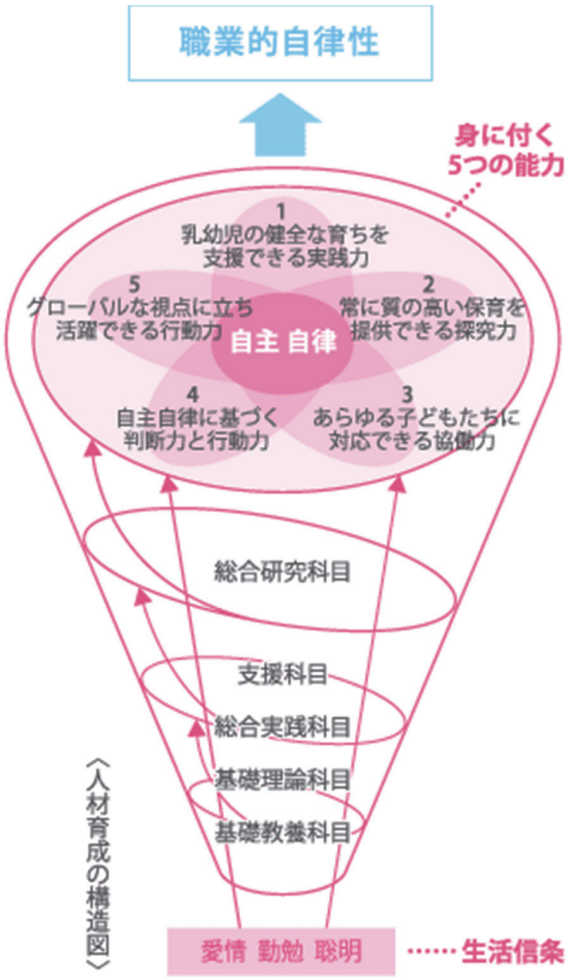
話題提供・ミニレクチャーを受けて　討論

まとめ　無藤隆氏

おわりに　増田まゆみ

５.研究の結果と考察Ⅱ

本研究の目的は、福島の子どもに関わる生活と保育のさらなる充実を目指すことであり、『震災・原発事故復興に利すると共に我が国将来の健全な乳幼児育成に関する向上、ことに保育実践,食生活,健康増進への多大な貢献や成果が期待される。』ことである。これらのことは、子ども学部子ども支援学科の人材育成構造図【すべての子ども、一人一人の可能性を広げられる保育者の育成】（図.２）[8] と合致する。



【すべての子ども、一人一人の可能性を広げられる保育者育成】
図２　子ども学部子ども支援学科：人材育成の構造図

前記の平成27・28年度に展開した福島の保育実践活動に関わった児童学科・子ども支援学科学生達の協働による活動を通して身につけたであろう成果と一致することが期待される。そこで、平成29年度【学科教育強化費】を活用して『子ども支援学科一期生（４年生）対象：福島復興支援にかかわる保育見学・参加・責任実習の展開』（表１）として、さらなる実践的活動展開を試みた。その成果は、提出された課題レポートに確実に表現されていたので、ここに本共同研究子ども支援学科４年生の参加学生による、いくつかの事例を示して明らかにする。

以下に「平成29年度学科教育強化費による「子ども支援学科４年生（第一期生）」対象の福島保育実践研修」の概要〔参加学生用配布・説明資料〕を示すので内容を把握いただきたい。

表１　平成29年度学科教育強化費による
「子ども支援学科４年生（第一期生）」対象『福島保育実践研修＜必修＞』

学科教育強化費による「子ども支援学科４年生（第一期生）」対象

『福島保育実践研修＜必修・全員出席・提出課題あり』

●研修目的：東日本大震災を乗り越え次世代に向けた子ども支援の実際を学修し、東京家政大学子ども学部子ども支援学科一期生として、各位が人生の指針を固める一助とする。　現在、日本が直面する歴史的重要課題把握を目的とし『福島保育実践研修＜必修＞』を受講し、仲間と共にその実際を真正面から確実に受け止め、東京家政大学子ども学部子ども支援学科第一期生として、雄々しく人生を切り拓く門出へ向けての励ましとする！
●研修日時：2017年８月 ２日（水）８時00分～19時20分頃
●集合：８月 ２日（水）８時厳守, 池袋駅西口の東京芸術劇場横
●研修場所：
◎ほうとく幼稚園（〒974-8023　福島県いわき市後田町石田34番地
・生駒副園長（東京家政大学大学院卒）：震災前後の実際と現在から将来への展開
◎わかぎ幼稚園（〒971-8101　福島県いわき市小名浜字下明神町33-1
・小名川園長（一期　生保護者）：震災前後の実際と現在から将来への展開
●参加者：東京家政大学子ども学部子ども支援学科４年生107名
　引率教員５名（Ａクラス：小櫃・那須・渡部、Ｂクラス：細井・大澤）
●持参物：昼食（お弁当など）・おやつ・飲み物・汗拭きタオル・履きなれた靴・筆記具
●参加費：東京家政大学の学科教育強化費にて支払うので参加者への参加費の負担なし、全員必修とし提出課題あり＜提出締め切り：９月14日(木)17時までに提出ポストへ＞
●研修課題：本学部学科の一期生として、ほうとく幼稚園・わかぎ幼稚園における学修を通して受け止めた感想と今後の自分自身の生きる指針と将来の夢について述べよ。
（表紙：テーマ：福島保育実践研修を通しの学修・サブテーマ＜各自で設定する＞学籍番号・氏名記載および本文：Ａ４・２枚、計３枚をホチキス止めにして期日厳守で提出のこと）
使用バス：西武バス大型２台13時45分出発⇒ 14時20分：わかぎ幼稚園到着、見学（30分）・講義（60分）＜滞在：１時間30分＞15時50分出発⇒ 池袋＜19時20分着予定＞

１）福島保育実践研修を通しての学修：＜子どもの生きる力を引き出す環境とは＞

子ども支援学科４年生・M.H.（福島県相馬郡出身）

・園見学を通して学んだこと

子どもは生きる力を養う為の環境づくりの大切さを感じました。子どもにとって“生きる力”とは、平坦な場所では得ることが出来ず、かといって、私達大人が幼児したものを予想通りにうまく利用して成長していくかというと、そうではありません。私は、４年間の学びを通して、生きる力は主に以下の２つのことであると考えました。１、身体の生きる力（自分の力で何かを成し遂げたり、困難を乗り越えていく力。それに伴う身体機能の発達）２、心の生きる力（物事を考えたり、善悪を自分で判断して困難を乗り越えていく力）。保育者は、これを引き出すために、子どもの可能性を最大限に広げることが求められる、これは保育者一人の単位で行うのではなく、園全体で取り組むことで、環境を整えていく事が必要であることを見学を通じて感じました。…

・今後の自分の生きる指針と将来の夢

…敷かれたレールの上を歩くだけではなく、多少遠回りだとしても、自分の歩く道を自分で選択していくことの大切さを改めて感じ、家庭を持った時には、この経験を子どもに伝えて子どもが一人で歩いている姿を見守る事ができる自分になるのが、将来の夢です。

Ｈ幼稚園園舎前にて

Ｗ幼稚園園舎前にて

２）福島保育実践研修を通しての学修：＜地元の幼稚園で学んだこと＞

子ども支援学科４年生・O.W.（福島県いわき市出身）

・園見学を通して学んだこと

私は福島県いわき市出身で、今回の研修場所の一つであるＷ幼稚園は、現在母が園長を務めており、また私の出身園でもある。今回福島研修に行く前の心境は、地元であり母からも少し話を聞くことが何度かあったので、震災当時の状況や現在のいわき市での保育での様子を知っているつもりで臨んでいた。実際に福島研修を終えたときの感想として、学ぶ・考える・吸収することが多くあったと感じた。…

Ｈ幼稚園I先生の「いつも答えは子どもが持っている。」という言葉が印象的だった。先生は震災の問題について考えているときに、子ども達の考えや言葉に気づかされることがあったそうだ。子どもは大人のように震災がもたらした影響がわかる訳でもなく、知識がある訳でもない。しかしセンス・オブ・ワンダーを持つ子ども達だからこそ、大人には気づけない視点から考えること、純粋な気持ちを持つからこそ素直にその問題に疑問をもつことができる。これはわたくし自身も実習などで子どもと関わるときに、子どもがふと発した言葉や行動に気づかされ、責任実習などに生かすからこそ、大人のような硬い頭では考えつかない答えを持っているのであろうと思った。これから保育するにあたって、子どもの視点に立つことを忘れないようにしたい。…午後からはＷ幼稚園に移動した。…

震災後、新学期が始まっても外遊びはなかなかできず、入園してきた２・３歳児も外遊びの仕方がわか

らなかった。以前母から聞いていたのだが、放射能の影響で海に入れず海の近くに住んでいる子どもが海がしょっぱいといことがわからないということを聞いたときは驚いたが、今回の外遊びの仕方がわからないということにも驚きがあった。あの震災だけで子ども達の遊びに変化がでることに恐怖を覚えると同時に、このときにどのような遊びの支援があるのだろうかと思った。そとあそびの仕方がわからないというのは、私達が昔遊び（ゴム跳びやコマ回し等）をやらなくなりやり方がわからないことと同じで、子どもが勝手にやるだろうと放っておくのではなく、誰かが伝えなければいけないのではないかと思う。そのために、保育者が見本となるような遊び方を提示する。しかし、前に出すぎず、子ども達自身が新たな遊びを発見できるような環境が大切なのではないかと考える。

３）平成27・28年度実施「福島保育実践活動参加」および平成29年度実施「福島保育実践研修参加」学生の感想に関する考案

１）のM.H.は福島県相馬郡の出身であり、大澤ゼミの一員といったこともあり日頃の学生生活の様子から推し計かることのできる現実を確実に受け取りつつ、前へ着実に歩み出すという生きる姿が読み取れる。２）のO.W.は福島県いわき市の出身であり、見学したW幼稚園の関係者でもあることから、切実な現状を確しかな目でとらえ、自分自身の生き方と重ねつつ、前進してゆこうとする力強く頼り甲斐のある生き方が読み取れる。二人共に５年後、10年後の活躍が大いに期待できる。

こうした学生一人一人の保育実践活動および保育研修活動の成果としての人材（財）の育成こそ、真の意味での『東日本大震災を乗り越える実践的研究』の大きな成果のひとつと伝えるであろう。

おわりに

本実践研究は、東京家政大学の学生を中心にしながら、家政学部児童学科・子ども学部子ども支援学科・看護学部看護学科・短期大学部保育科・ヒューマンマンライフ支援センターの教職員、さらに人間環境大学・鶴見大学短期大学部・市川クリニックのスタッフが、福島の保育現場（保育園・幼稚園・認定こども園）との協働による共同研究といった新たな視点を有する試みの中間研究報告である。

いつの時代にも困難な問題は必ず存在する。しかし、重要なことは、困難な問題の本質を直視し、関係する多くの人が力を合わせ、雄々しく乗り越えるべく挑むことである。子ども達の輝く笑顔あふれる明るい未来に向かって！

引用参考文献

１）大澤力・増田まゆみ・岩田力・川合貞子・細田淳子・関章信・生駒恭子・高荒正子（2013）,東日本大震災をいかに乗り越えるか―福島県における子どもの実態と保育の研究Ⅰ―,
東京家政大学生活科学研究所報告,第36集,pp,9-17.

２）大澤力・増田まゆみ・岩田力・川合貞子・細田淳子・関章信・生駒恭子・高荒正子（2014）,東日本大震災をいかに乗り越えるか―福島県における子どもの実態と保育の研究Ⅱ―,
東京家政大学生活科学研究所報告,第37集,pp,1-8.

３）大澤力・増田まゆみ・岩田力・川合貞子・細田淳子・関章信・生駒恭子・高荒正子（2015）,東日本大震災をいかに乗り越えるか―福島県における子どもの実態と保育の研究Ⅲ―,
東京家政大学生活科学研究所報告,第38集,pp,107-114.

４）増田まゆみ・大澤力・秋山里紗(2017 子ども環境学会)東日本大震災をいかに乗り越えるか　自然環境への関わりが子どもの育ちにいかに重要かを福島での保育実践から探る

５）幼稚園教育要領＜平成29年度告示＞平成29年3月31日　文部科学省　告示第62号

６）保育所保育指針＜平成29年度告示＞平成29年3月31日　厚生労働省　告示第117号

７）幼保連携型認定こども園教育・保育要領＜平成29年度告示＞平成29年3月31日
内閣府・文部科学省・厚生労働省　告示第1号
８）文部科学省中央教育審議会（平成27年8月26日）
資料1-1「学習指導要領の改訂に向けた検討状況について」
９）東京家政大学ホームページ http://www.tokyo-kasei.ac.jp/・子ども学部子ども支援学科